シュメールの宇宙から飛来した神々②

STAIRWAY TO HEAVEN

宇宙船基地はこうして地球に作られた

ゼカリア・シッチン
竹内 彗［訳］

『神々・創造主の正体
アヌンナキという宇宙人』待望の新装版
ピラミッド、スフィンクス、エルサレム
宇宙ネットワークの実態

ヒカルランド

シッチン説骨子①　古代シュメールのアヌンナキ神話は、実話ドキュメント！

旧約聖書、ギリシャ神話に描かれている巨神伝説の起源とされる古代シュメール神話――。そこに登場する巨大な神々の名称を、アヌンナキ（またはネフィリム）と呼ぶ。シュメール古文献では、実際どのようにアヌンナキは描かれていたのか？

シュメールは人類最古の文明といわれ、メソポタミアの地に突如出現した。超高度な技術社会を築いたとされているが、その興亡を含め、はっきりしたことはわからず、人類史上最大の謎のひとつとされてきた文明だ。

シュメール語を解読できる世界で数少ない言語学者・考古学者のゼカリア・シッチンが、この難事業に挑んだ。その研究の集大成ともいえる「地球年代記シリーズ」は、神話学、考古学、天文学、物理学、数学、分子生物学、宇宙工学など、あらゆる「知」の分野を総結集して編纂され、世界的大ベストセラーになった。シッチンの導き出した科学的解析の数々は、驚嘆すべき内容だ。

①アヌンナキは、古代シュメール語で「天から地球に来た者たち」を意味するが、単なる古代人の空想上の産物ではなく、その意味が示すとおり、別の惑星から宇宙船で地球に飛来した宇宙人であること

②最初に地球に派遣されたアヌンナキのリーダーは、科学者のエンキで、「地球の神」として君臨し、遺伝子工学によって人類を創り出したこと

③大洪水のときに、エンキはノアに方舟の作り方を教えて、人類を絶滅から救ったこと
④宇宙の神々（アヌンナキ）を祀るメソポタミアの神殿には、宇宙への扉となるスターゲートが実在していたこと

などなど……超古代の地球の様子、人類創成の経緯、宇宙人との交流などが、豊富な古文献の資料から、臨場感をもって解き明かされている。

では、アヌンナキはどこから飛来したのか？　彼らの故郷はどのあたりに存在するのか？

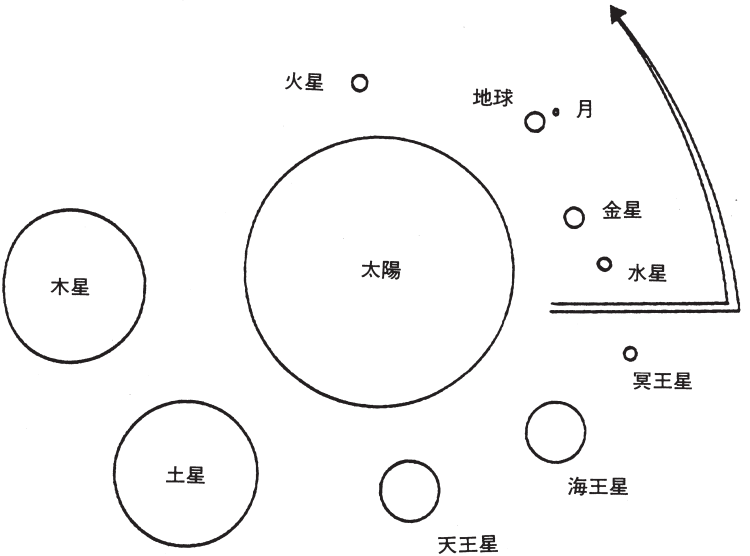
シッチン説骨子②　アヌンナキの故郷は、ＮＡＳＡも探索中の太陽系「第12惑星」

古代メソポタミアの古文書（シュメールの円筒印章：次ページ図版参照）には、太陽、月、冥王星を含めた太陽系11惑星のほかに、ニビルという名の「12番目の惑星」が記録されている。

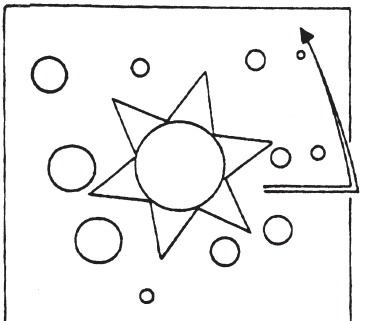
これこそ、現代宇宙天文学のホットな話題のひとつであり、ＮＡＳＡをはじめ天文学者たちが、太陽系内未発見の惑星として探索を続けている「惑星Ｘ」と合致するものではないかと言われている。

円筒印章の太陽系は、惑星の場所を正しい順序と大きさで説明しており、惑星ニビルは火星と木星の間に描かれている。驚くべきことに、近代に発見された天王星、海王星、冥王星もその中に描かれ、月は、単独の天体として扱われている。アメリカのアポロ宇宙船が、月面探査を行うまで、月は地球から分離した巨大な塊などと推測されていた。しかし、その後のＮＡＳＡの分析により「地球と月は、ほぼ同じ要素で、ほぼ同時代に形成されたが、別々の天体として進化した」と結論づけられている。

シュメール人が円筒印章に刻んだ12の天体から成る太陽系



太陽を中心に惑星を円形に並べた図



シュメール人の円筒印章を拡大して描写した図。太陽系からの惑星の順序とサイズが正しく示され

約1世紀まえにメソポタミアで発見された古文書「天地創造の叙事詩」は、聖書と酷似しているばかりでなく、太陽系の発生や地球誕生など、聖書以前の原始の宇宙を記述していることでも大いに注目された。そこには、地球と小惑星帯が、第12惑星の衛星との衝突などにより誕生したこと、地球と月がお互い独立した存在であったことなどが、壮大なスケールで描かれている。ここに登場する惑星の名前に、惑星ニビルの英雄たち（アヌンナキ）も刻まれており、シッチンは、まさに額面どおり、この物語を宇宙創造の事実ととらえ、惑星ニビルの宇宙人が、実際にシュメール人に伝えたものと断言する。

そして、これらシュメールの古代文献に遺されたアヌンナキの痕跡を丹念に紡ぎ合わせ、アヌンナキの故郷が第12惑星であるとの結論を導き出す。

また、シュメール歴代の神々の在位期間などから割り出した数字をもとに、シッチンは、惑星ニビルの公転周期を3600年と考えた。生物物理学によれば、生物の時間感覚は、体の大きさと関連しており、体が大きくなれば寿命も延びるとしている。単純な比例関係だけで結論づけることはできないが、神話で描かれた巨人アヌンナキの寿命が、人間の寿命よりも長いのはたしかだ。周期が地球の3600倍の惑星から飛来したアヌンナキは、人類からみれば「不老不死の神々」として崇めるべき絶対的な存在であったともいえる。

シッチン説骨子③　アヌンナキの地球到着は45万年前！

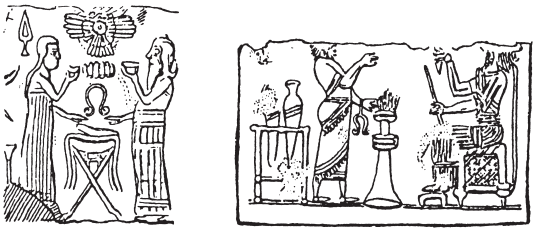
アヌンナキの宇宙飛行士は、45万年前に地球にやってきた。その目的は、母星ニビルの環境にからん

で、金（ゴールド）が絶対的に必要となったからだ。惑星ニビルを取り巻く保護膜が消失しかけていた。保護膜なしでは、ニビルでの生命活動は不可能となる。保護膜再生のために金（ゴールド）は必要不可欠な物質だった。

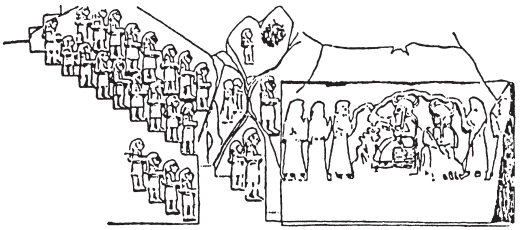
幸い地球には、それが豊富にあったのだ。ニビルへの地球ゴールドのピストン輸送が始まった当時、人類は存在していなかった。アヌンナキは役割を分担し、すべてを彼らの手でやり遂げなくてはならなかった。金採鉱は、アヌンナキのテクノロジーをもってしてもつらいものだったようである。やがて金採鉱の役割を与えられたアヌンナキたちが反乱を起こした。その理由の一つに、寿命の短縮があった。母星のアヌンナキと比べて、地球に暮らすアヌンナキたちは、ペースが速い地球上で長いライフサイクルを維持するために、宇宙飛行士たちは故郷の惑星から供給される「命の食べ物」と「命の水」を摂取しなければならなかった。絡まりあったヘビの紋章をもつエアというアヌンナキ（次ページ図版参照）は、エリドゥにある生物実験室で命と生殖と死の謎を解明しようとしていたが、反乱を起こしたアヌンナキはそれを待ってはいられなかったのだ。解決策として、彼らは自分たちにとってかわる生物ロボットを作ることを決定した。アヌンナキの遺伝子と地球生物の遺伝子をかけ合わせて、人類を作ったのだ。初めすべての人類はクローンによって作られていた。しかし、ある時人類は自ら繁殖できるようになって増えていった。人類の増殖に反対するアヌンナキの中に再び対立が起こった頃、彼らは地球の天変地異を察知した。大洪水である。アヌンナキたちは、一旦宇宙へ避難することになった。人類にはそのことは知らせず、滅びるにまかせる決定が下った。だが、その時、人類の一部に事の次第を告げ、生き延びる方策をさずけたアヌンナキがいた。ノアの神話の物語は本当にあったことなのだ（205ページ参照）。地球が落ち着きを取り戻した時、アヌンナキたちは再び戻ってきた。そこで、彼らは生き延びた人類を見て激怒した。しかし、これから壊滅した彼らの宇宙基地とゴールド搬送のシステムを回復させ

絡まりあったヘビの紋章をもつエア（エンキ）。200ｐも参照

シュメールの円筒印章に描かれた水の神で鉱業の神エア。鉱山から出てきた絵図



人類創造の仕事を進めるエア（エンキ）と女神ニンハルサグ



アヌンナキたちが次々と人類を生産している様子。このとき人類はまだ繁殖機能を持っていない

るために、人類の労働力は不可欠なものだった。こうして、人類は、アヌンナキ社会の中、それなりの地位を獲得したのだった。本書のアヌンナキと人類の秘された歴史は、ここから始まる。人類の歴史とされるシュメールと四大文明勃興の中の真実のストーリーである。

本書の骨子①　ピラミッドはアヌンナキの宇宙基地の基点として利用されていた！

古代の不死の探求の目的地が宇宙船基地だったことは、もはや疑いようがない。そして、それはシナイ半島のどこかにあったのだ。

ギザのピラミッドは、アララトの峰を焦点とする着陸用グリッドの一角をなし、宇宙管制センターとしてエルサレムを擁し、宇宙船をシナイ半島にある宇宙船基地へと誘導していた。

だが当初、ピラミッドは誘導灯の役目を果たしていた。単純に、その立地、配列、形状が適していたからだ。これまで見てきたように、全てのピラミッドの中心部分は階段ピラミッドだった。メソポタミアのジッグラトを真似たのだ。しかし、「天からやってきた神々」がギザで縮尺模型を試してみると（第3のピラミッド）、ジッグラトの輪郭とそれが起伏の激しい岩々や絶え間なく変わる砂に落とす影は、不鮮明な上に不正確すぎて、方向を指し示す信頼できる指針の役目を果たさないことが分かったのだろう。階段部分に外壁をつけることで「正確な」ピラミッドにし、その外壁に（光を反射する）白い石灰岩を使用することで、光と影の完璧なゆらぎを獲得し、くっきりした方向づけをもたらした。

１８８２年、ロバート・バラードは汽車の車窓からギザのピラミッドを眺めていて、絶え間なく変わるピラミッド間の配置（次ページ図版参照）によって、自分の位置と方角を割り出せることに気づいた。ピラミッド学者たちは、ピラミッドが落とす影が巨大な日時計の役割を果たすことにも気づいていた。影の方向と長さが時期と時間を知らせるのだ。

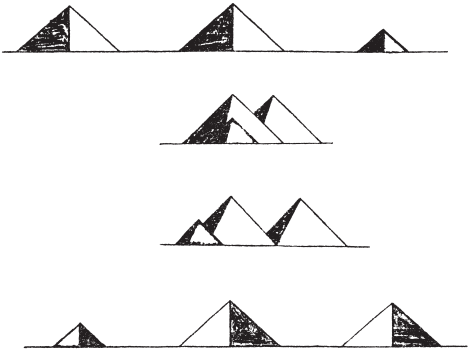
さらに重要なのは、ピラミッドの輪郭と影が空からどう見えるかだ。次ページの航空写真が示すように、正確な形のピラミッドは矢印のような影を落とし、紛れもない方向指示器の役割を果たしている。

適切な宇宙船基地を築く準備がすべて整った時、着陸用空中回廊はバアルベックでのものよりずっと長くする必要があった。メソポタミアにあった以前の宇宙船基地のために、アヌンナキ（聖書のネフィリム）は近東でもっとも目立つ山を焦点に選んだ。同じ配慮から、新しい宇宙船基地の焦点として彼らが再びそれを選んだとしても意外ではないだろう。

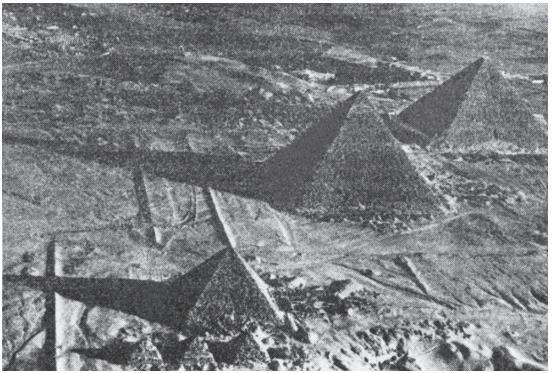
アヌンナキがレイアウトした〝着陸用グリッド〟の蓋をとってみると、三角法と配列の果てしない「偶然の一致」が見つかる。アララトの山々が新しい着陸用空中回廊の焦点だったとしたら、空中回廊の北西の線だけでなく、南東の線もアララトに焦点が合っていたはずだ。しかし、その南東の線の端は、シナイのどこに固定されていたのだろうか？

シナイの宇宙船基地のために、大洪水前にメソポタミアで着陸飛行経路を統括したのと同じような宇

ピラミッド建築の最高傑作と言われるギザの大ピラミッド（第 4 王朝のファラオ・クフ王の墳墓）



ピラミッド間の配置により方角と位置を割り出せる。またピラミッドの落とす影が巨大な日時計の役割も果たしていた。481 p も参照



宙管制センターを造らねばならなかった。だが、どこに？

私の答えは、エルサレムである。

本書の骨子②　エルサレムは宇宙管制センターとして作られたものだった！

ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒にとって神聖なエルサレム。その雰囲気は説明不可能なこの世ならぬ謎で満たされている。ダビデ王が首都に制定し、ソロモンがそこに「主の住まい」を建てる以前から聖なる町だった。父祖アブラハムがその門にたどり着いた時、エルサレムはすでに「天と地の正義の者、至高なるエル」の揺るぎない中心地であった。知られている最古の名前はウル・シャレム、「完成した周期の町」で、軌道問題や〝軌道の神〟との関連を暗示している。シャレムは誰かということに関して、学者たちはさまざまな説を提示している。（ベンジャミン・マザールによればダビデ王政の前のエルサレム）エンリルの孫息子シャマシュを挙げる者もいれば、エンリルの息子ニニブとする者もいる。しかし、全ての説で、エルサレムのルーツとメソポタミアの神々の関連は議論の余地はない。

エルサレムは当初から3つの山を取り囲んでいた。北から南へ、ゾピム山、モリア山、ジオン山だ。その名前はそれぞれの役割と物語っている。いちばん北のゾピム山は「観測者たちの山」（現在の英語名はスコパス山）。真ん中のモリア山は「道を教える山」。そして、いちばん南のジオン山は「信号の山」である。何千年もたった今でさえそう呼ばれているのだ。

エルサレムは「神の」通信センター、「光輝の石」が隠された場所であり、そこから神の〝言葉〟あるいは〝声〟があまねく発せられたという考えは、それほど途方もない話ではない。そうした通信についての概念は旧約聖書と無縁ではなかった。実際、神がそうした能力を持っていることや、エルサレムが通信センターとして選ばれたことは、ヤハウェとエルサレムの覇権の証明だと見なされていた。「私は天に返事をし、彼らは地球に応えるだろう」と神は預言者ホセアに請け合った。預言者アモスは「ヤハウエはシオンからほえたけり、エルサレムから声をとどろかされる」と予言した。ダビデは詩編で、「神がシオンから話される時、その表明は地球の一方からもう一方まで、そして天国にも響き渡る」と記している。

神々にヤハウェは話された、
そして地球を、彼は呼ばれた
東から西まで……
天国を、彼は呼ぶだろう、
そして地球を。

エルサレムの神殿を復元することで「ヤハウェの言葉がエルサレムから発せられるだろう」と預言者たちは約束した。エルサレムはあらゆる国々から求められる世界の中心地として復興するだろうと。イザヤは神の約束を告げ、「探索の石」だけでなく「測定」機能も復旧すると請け合っている。

エルサレムは「地球の中心（へそ）」であるとユダヤ人は言い伝えてきた。預言者エゼキエルはイスラエルの民を「地球の中心（へそ）の上に住んでいる」と記している。士師記には、人々が「地球の中心（へそ）」の方角から山々を下りてきたという出来事が載っている。「地球の中心」という言葉は、エルサレムが中心的な通信センターであったことを意味し、そこから「縄」が着陸用グリッドの他の地点まで引かれて固定されのだ。ヘブライ語で聖なる岩をエベン・シェティヤと言うのは単なる偶然ではない。エベンシェティヤとは、ユダヤの賢人たちによれば「そこから世界が織られる石」を意味した。事実、シェティは、織り機の縦にかける長い紐（縦糸のこと。短い横糸と交差させる）をさす。織物のように〝神の縄〟で地球を覆うための、正確な地点を記し漬けする石にはぴったりの用語だ。

しかし、これらの用語や言い伝えと同じくらい暗示的で、決定的な問いがある。エルサレムは実際に、アララトを起点にギザのピラミッド群とウム・シュマル山とで輪郭を描く着陸用空中回廊を2等分する中央線上にあるのかだ。

答えはイエスである。エルサレムはまさにその線上にあるのだ！

ギザのピラミッド群の場合もそうだったが、〝神のグリッド〟の場合も暴いていけばいくほど、驚くべき配置と三角法が明らかになっていく。

エルサレムは、ヨベルの書によれば、地球上に4つあった「神の場所」の一つであった。神の場所とは、ヒマラヤ杉の山にある「永遠の園」、「東の山」すなわちアララト山、シナイ山、そしてシオン山である。3つは、ノアの息子で聖書の族長たちの先祖である「シェムの国」にあり、相互に連絡していた。

もっとも聖なる、永遠の園は
神の住居
そして砂漠の真ん中のシナイ山
地球のへその中心にあるシオン山
これら3つは神聖な場所として作られた
お互いに向き合って

アララト山に固定された中央の飛行ライン「エルサレムの線」のどこかに、宇宙船基地本体がなければならない。そこに、最後の誘導灯も位置していたはずだ。「砂漠の真ん中のシナイ山」である。

仏教の神聖な町、チベットのラサがいつ築かれたのか、誰も知らない。だが、ラサもエリドゥやヘリオポリス、ハラッパ、ペルセポリスと同様に、同じ30度線上に位置しているのだ（502ページ図162を参照）。

30度線の神聖さは、神の測定者たちがギザのピラミッドの位置を30度線上に決定した〝神聖なグリッド〟の起源までさかのぼるはずだ。神々はシナイ半島の自分たちだけの第4の地域に、最重要な宇宙船基地を設置する段になって、この「神聖な」もしくは中立地帯としての30度線をやめただろうか？

本書の骨子③　スフィンクス「地球の門を開く偉大なる神」の役割

第18王朝時代のある賛歌はさらに、スフィンクスの下の2つの「洞窟」が、通信センターとしての機能を果たすことを可能にしていることを明かしている！

スフィンクスの周りの神殿からは、たくさんの「耳型銘板」や、神託の場所と関連したシンボルである2羽の鳩の絵が見つかった。古代の碑文と同じく、それらもスフィンクスが神のメッセージを伝えることができたことを証言している。スフィンクスの下を掘ることに成功しなかったからと言って、神々が「命令を口にして」入室した地下の部屋が見つかるかもしれない可能性を排除することはできない。

おびただしい数の埋葬文書から、スフィンクスが死者を「昨日」から「明日」へ案内する「聖なる案内人」と見なされていたことは明らかだ。死者が「隠し扉の道」にそって旅出来るようにと記された棺の呪文は、スフィンクスの場所から旅がはじまることを暗示している。呪文は、スフィンクスに祈願し、「地球の主が命じ、2つのスフィンクスが繰り返した」と断言している。旅はホル・アケト、すわなちスフィンクスが「通れ！」と宣言してはじまるのだ。その旅を描いた『2本の道の書』には、ギザの出発地点からデュアトにたどり着くことができる2本のルートがあることが示されている。

聖なる案内人であるスフィンクスは、〝天のはしけ〟を水先案内している姿で描かれている。トトメ

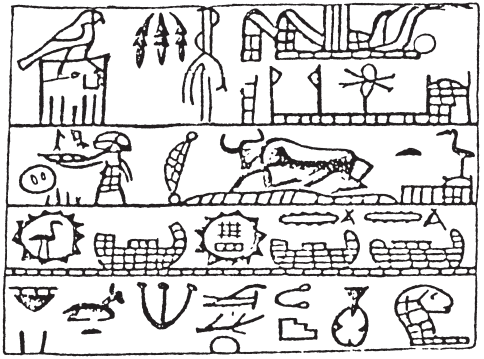
スの石碑（次ページ図版参照）でのように、「昨日」から「明日」へと〝天のはしけ〟を誘導する、2つのスフィンクスとして描かれることもある。この役目では「地下王国の隠れた神」と関連づけられていた。その姿は、デュアトのセケル神の封印された部屋の両側に象徴的に描かれていたのが思い出される。

事実、ピラミッド文書と死者の書は、スフィンクスのことを「地球の門を開く偉大なる神」と表現している。ギザのスフィンクスが「道を案内し」、天国への階段の近くのもう一つのスフィンクスが「地球の門」を開けたことを暗示しているようだ。そう考えると、ファラオの来世への旅を描いた非常に古風な絵（次ページ図版参照）を唯一説明できる（現在まで解釈はなされていない）かもしれない。この絵を順に追っていこう。まず、かがんだホルスの象徴がナツメヤシの国の方を見つめ、そこには珍しい浚渫船もしくはクレーン船がある。船は、シュメールの絵で通信センターとして描かれたエンリルの名前（次ページ図版参照）をしのばせる構造をしている。一人の神がファラオを出迎えており、牡牛と不死の鳥の姿が見える。要塞と各種の象徴が続き、最後に「場所」をあらわす象徴（丸のなかに傾いた十字架）が階段を示す印と反対方向を向いているスフィンクスとの間に現われるのだ！

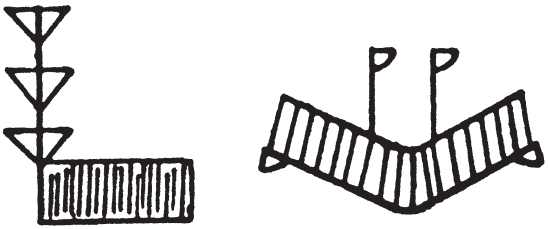
実際、これら全ての場所を研究しようと思えば、おそらく地球全体を視野に入れねばならないだろう。そして、バアルベックに秘密の施設を作った時、バアルはすでにそれを心得ていたのではないのか？思い出してみよう。彼の狙いは、近隣の国々だけではなく、地球中と連絡をとり支配することだったのだから。

このことを聖書の神も知っていたに違いない。ヨブが「エルの驚異」を解明しようとした時、神は「渦巻きの中から彼に答え」、質問を質問で返した。

天のはしけを水先案内するスフィンクスが描かれた石碑。511 p も参照



ファラオの来世の旅を描いた絵図。511 p も参照



EN LIL

風の支配者でもあるエンリルの象形文字。巨大なレーダーのネット＝通信センターを連想させる

わたしはおまえに尋ねる、わたしに答えてみよ。
わたしが地球の基礎を据えたとき
おまえはどこにいたのか？
科学を知っていたというのなら、言ってみよ。
誰がそれ（地球）を測ったのか、知っているのか？
誰がその上に測り縄を張ったのか？
何によってそのプラットフォームは造られたのか？
誰がその隅の石を置いたのか？

そして神はご自身に答えて言われた。地球の測定、プラットホームの設計、隅の石の据えつけといった、全ての行為が行われたのだと。

そのとき、夜明けの星はこぞって喜び
神々の息子たちはみな、喜びの声をあげた。

人は、どんなに賢いつもりでも、これらの出来事にまったく関わっていないのだ。バアルベック、ピラミッド、宇宙船基地。すべては神々のためだけに造られたのだ。
それでもなお、人は不死を探し求め、スフィンクスの眼差しを追い続けたのだった。

カバーデザイン　三瓶可南子

本文仮名書体　文麗仮名（キャップス）

シュメールの宇宙から飛来した神々②

宇宙船基地はこうして地球に作られた——目次

STAIRWAY TO HEAVEN

001 シッチン説骨子① 古代シュメールのアヌンナキ神話は、実話ドキュメント！

002 シッチン説骨子② アヌンナキの故郷は、NASAも探索中の太陽系「第12惑星」

004 シッチン説骨子③ アヌンナキの地球到着は45万年前！

007 本書の骨子① ピラミッドはアヌンナキの宇宙基地の基点として利用されていた！

010 本書の骨子② エルサレムは宇宙管制センターとして作られたものだった！

014 本書の骨子③ スフィンクス「地球の門を開く偉大なる神」の役割

第1章

031 **創造主（不死のアヌンナキ）との生活の場から追放された人類は エデンの園＝不死の水をこうして求め始めた……**

032 大航海時代の探検の真の目的は「永遠の若さの泉」を発見することだった

037 モーセがその旅に求めたものは、「干からびた魚を生き返らせた水」だった

044 アレキサンダー大王が、その旅に求めたものは、「不死の魔法の水」！
053 教皇や王室による密使の派遣の目的――プレスター・ジョンの王国とは？

第2章
061 **不死の人エノクの天空への旅は、「地球の真ん中」を通って宇宙の隅々を見学するものだった**
062 ヘロドトスが書き残していた「長寿のエチオピアス」
065 アレキサンダーが出会った神々は、不死の秘密を与えてはくれなかった
069 けっして死ななかったノアの曾祖父エノク
071 セソンクシス、コシュが光輝く神から頂いた〝命の果物〟
074 エリアを不死とした「不死の先祖たち」は、実在していた！
079 火の戦車、火の馬すなわち宇宙船で天に上ったエノク
082 エノクが連れて行かれた天国は、「地球の真ん中」に存在した

第3章
089 **ファラオの来世への旅は、神々（アヌンナキ）が導いた現実の出来事の描写である！**
090 〝天の潜水艦〟によって、秘密の門をくぐる

095 ファラオたちは、みな等しく、創造主のお目がねにかない不死へと導かれることを望んだ
104 ピラミッド文書の神話表現の奥に実在の創造主（アヌンナキ）が垣間見える

第4章
109 **天国への階段**
――地球地下から〝上昇させる物〟によって天空の天国〝不滅の星（創造主たちの母星）〟へ
110 地上・地下・天空を通る〝天国へのルート〟は、神話ではなく、神々（アヌンナキ）が実際に行った事実の描写である！
117 天国を目指す王が次に進む場所は地下の〝暗闇の国〟
121 審判の時を無事乗り越え生まれ変わった王は、天空へと歩を進める
128 ラーの上昇の山から〝天国の天空〟へ
131 「上昇させる物（ロケット）」の操縦者は4人のハヤブサ人間

第5章
147 **シュメール人は彼らを**
ディン・ギル（ロケット船の正しき者たち）と呼んだ！
148 ヘリオポリスはスミソニアン博物館
――古代エジプト人たちが見たのは現代のロケット、宇宙飛行士、発射台と同じもの!!
162 天人＝見守る者の意味すること

166 聖書の物語は事実であり正確だった！
176 天国から地球にやって来た神々――文明のルーツ、シュメールの発見！

第6章
189 **大洪水の前の時代**
――地上にはネフィリム（ロケット船の人々）との交配種“地球人”が地上に満ちていた！
190 ケタはずれの長寿――大洪水前の10世代の父祖たち
193 ネフィリム――地球に「投げられた者たち」は人の子と交わった
195 45億年前の地球訪問者たち――その目的は金（ゴールド）
196 反乱を起こしたアヌンナキの探鉱労働者――こうして地球人は作られた
205 大洪水を地球人に教えなかったエンリルと密かに備えるよう告げたエア
214 大洪水は1万3000年前のこと

第7章
223 **ギルガメッシュ**
――神々に不死を懇願（こんがん）した男
224 3分の2が神、3分の1が人間であったギルガメッシュ

231 ギルガメッシュとエンキドゥ（エンキが創造した生物）
237 叙事詩に刻まれた壮大なドキュメント

第8章
271 バアル（雲のライダー）vs ヤハウェ（翼のついた車輪）
——地球支配権を巡る飛行可能な神々の戦い
272 ヒマラヤ杉の森に神々の〝着陸場所〟が存在した
279 神々は、徹頭徹尾、〝宇宙からの飛来者〟の装いで描写されている
289 玉座とは、ザポンの頂上にある「安息所」＝「宇宙飛行士たちの休憩所」
301 天国（母星の政府）を欺いたバアルとモトの地球内部での熾烈な戦い

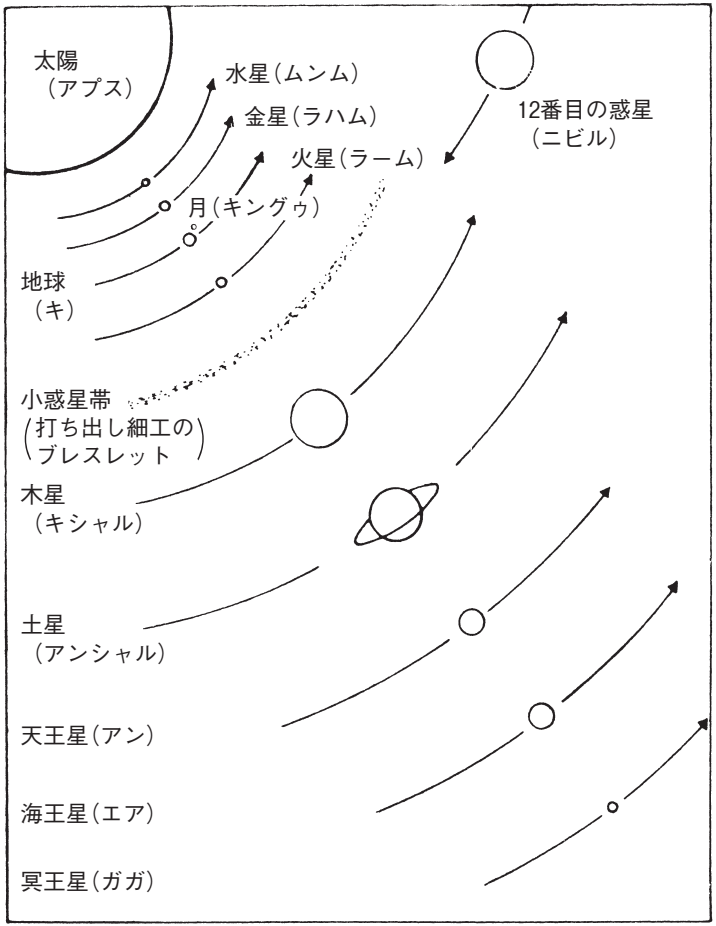
第9章
309 神々の〝着陸場所〟と〝通信センター〟の足跡を辿る
310 古代ローマ、ギリシア神殿から浮かび上がる元祖3神——アダド、イシュタル、シャマシュ
319 ギルガメッシュが最初の旅で目指したバアルの〝ザポンの頂上〟は、バアルベックに実在した！
328 へそ石（通信機器？）の謎

第10章 339 **ティルムン（ロケット船の地）——古代の不死探求の目的地（宇宙船基地）は、シナイ半島にあった！**
340 シェムはロケット船、ティルムンはロケットが打ち上げられる場所で、シナイ半島に実在した！
347 大規模な冶金施設が、ティルムン（ロケットの地）と同じ場所に配置されていた
357 神々の住まいに生えている命の木＝ナツメヤシの産地はティルムン
第11章 369 **ネフィリムの宇宙船基地、聖書のシナイ山は、一つではなかった！**
370 モーセが神々と出会った場所、本物のシナイ山はどの山か
380 出エジプトの地を特定する
386 イスラエルの民は4つのルートのどこを通ったのか
397 ネフィリムたちの出入り口の山と到着・出発の山——シナイ山は3つ存在した
第12章 401 **古代王朝のピラミッドは、ファラオの遺体を安置する建物ではなかった**
402 神々の宇宙船基地の設置場所とピラミッドの驚くべき関係

416 ギザのピラミッド群発掘でわかった内部構造と素材の秘密
425 埋葬室の謎……古代王朝ピラミッドに王の遺体が収められたことはない

第13章
437 **捏造されたファラオの名前**
——ギザの大ピラミッドはクフ王のものではあり得ない
438 ギザのピラミッドを作ったのはクフ王ではなかった！
445 エジプト学はペテンに手を貸している！
454 ペテンが真実を覆い隠す
469 ピラミッドはすべての点で人間が構想したものではないことを示唆している

第14章
477 **ピラミッドはネフィリムの宇宙船基地の誘導灯**
478 ピラミッドは巨大な日時計の役割を果たす！
488 神の声が発せられる宇宙管制センターに選ばれたエルサレム
495 北緯30度線上に神聖な都市が並んでいるのはなぜか
504 神々の創造物スフィンクスとその役割

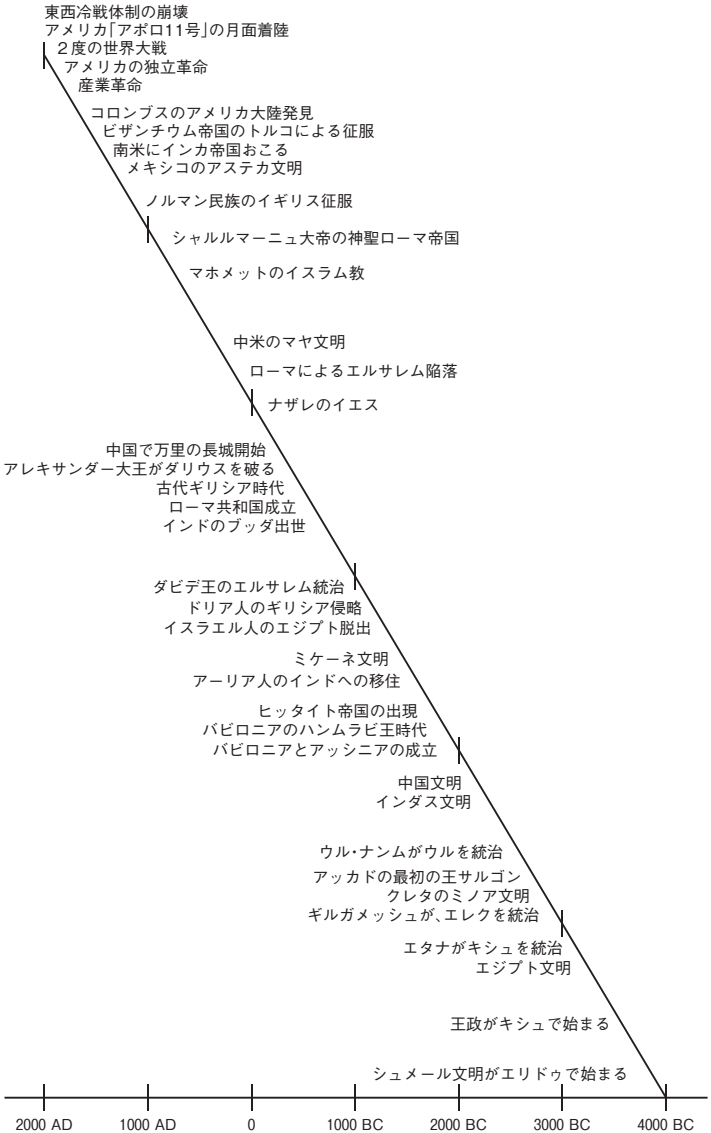


太陽系の惑星と太陽と月の位置関係を図式的に表したもので、縮尺は正確ではない。９つの惑星と太陽と月のほかに「12番目の惑星」（古代神々の故郷）が出ているが、この惑星は公転周期が3600年で、離心率も大きい。古代シュメール人は、太陽系の恒星と惑星を区別していなかったので、本書でも「12番目の惑星」あるいは「第12惑星」と呼んでいるが、現在の常識的な呼び方では、「10

「宇宙からの神々」による人類創成史

（年　代）	（出　来　事）
44万5000年前	・アヌンナキがエンキ（エア）に導かれ、第12惑星より地球に降り立った。エリドゥ８（地球第１基地）が南メソポタミアに建設された。
43万年前	・大きな氷の広がりが小さくなり始める。近東の地域では良い気候が続いた。
41万5000年前	・エンキが内陸を踏査し、ラルサをつくった。
40万年前	・長期の間氷河期が地球規模で広がった。エンリルが地球に到達し、ニップールに派遣団司令（宇宙飛行管制）センターをつくった。 エンキが南アフリカに行く海路をひらいた。
36万年前	・アヌンナキが金属を溶解し精製するための冶金工場を建設した。 シッパールをはじめとする神々の都市に、宇宙港がつくられた。
30万年前	・アヌンナキの反乱。人―原始人がエンキとニンハルサグによってつくられた。
25万年前	・初期のホモ・サピエンスが多数、大陸へ移住した。
20万年前	・新氷河期の間、地球上の生命が後退した。
10万年前	・気候が再び暖かくなり始めた。 神々の子たちは人間の娘を妻に迎えた。
７万7000年前	・聖なる親から生まれた人間ウバルツツとラメクがシュルバクで、ニンハルサグの庇護の下、統治を始めた。
７万5000年前	・地球受難の時代―新氷河期が始まった。退化した人間が地球を放浪していた。
４万9000年前	・忠実な下僕ジウスドラ（ノア）の統治が始まった。
３万8000年前	・７期間も続いた過酷な気候で人が死に始めた。 ヨーロッパのネアンデルタール人は滅び、クロマニョン人だけが近東の地域で生き延びた。 エンリルが人間を抹殺しようとした。
１万3000年前	・アヌンナキは、第12惑星の接近が引き金となる洪水が来ることを知っていながら、人間には知らせず、滅亡させてしまおうと誓った。 大洪水が地球を襲い、氷河期が突然終わった。

その後の人類史


東西冷戦体制の崩壊
アメリカ「アポロ11号」の月面着陸
2度の世界大戦
アメリカの独立革命
産業革命
コロンブスのアメリカ大陸発見
ビザンチウム帝国のトルコによる征服
南米にインカ帝国おこる
メキシコのアステカ文明
ノルマン民族のイギリス征服
シャルルマーニュ大帝の神聖ローマ帝国
マホメットのイスラム教
中米のマヤ文明
ローマによるエルサレム陥落
ナザレのイエス
中国で万里の長城開始
アレキサンダー大王がダリウスを破る
古代ギリシア時代
ローマ共和国成立
インドのブッダ出世
ダビデ王のエルサレム統治
ドリア人のギリシア侵略
イスラエル人のエジプト脱出
ミケーネ文明
アーリア人のインドへの移住
ヒッタイト帝国の出現
バビロニアのハンムラビ王時代
バビロニアとアッシニアの成立
中国文明
インダス文明
ウル・ナンムがウルを統治
アッカドの最初の王サルゴン
クレタのミノア文明
ギルガメッシュが、エレクを統治
エタナがキシュを統治
エジプト文明
王政がキシュで始まる
シュメール文明がエリドゥで始まる
2000 AD
1000 AD
0
1000 BC
2000 BC
3000 BC
4000 BC